

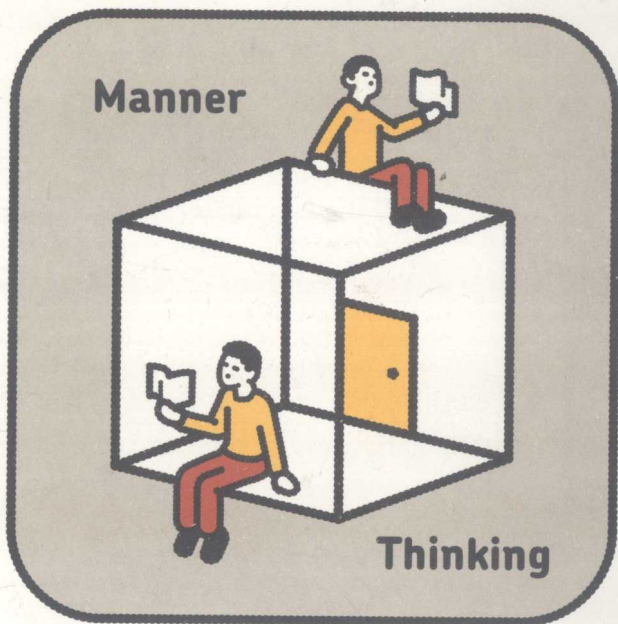
穂村弘 * 劇団ひとり * 佐藤優

*
赤瀬川原平

*
鷺田清一

*
井上荒野

考える



*
津村記久子

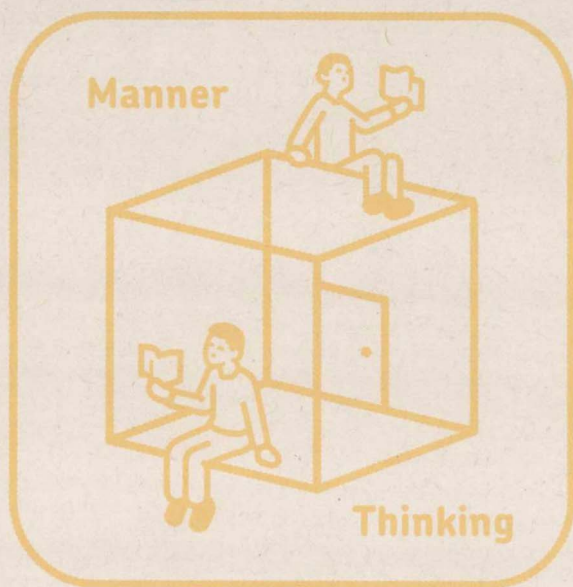
*
高橋秀実

*
平松洋子

マナー

楊逸 * 三浦しをん * 町田康 *

中央
論社
中公
新社



考える マナー

赤瀬川原平

井上荒野

劇団ひとり

佐藤優

高橋秀実

津村記久子

平松洋子

穂村弘

町田康

三浦しをん

楊逸

蔵田清一

中央公論新社

かんが

考えるマナー

2014年7月25日 初版発行

著者 赤瀬川原平／井上 荒野
劇団ひとり／佐藤 優
高橋 秀実／津村記久子
平松 洋子／穂村 弘
町田 康／三浦しをん
楊 逸／鷺田 清一

発行者 大橋 善光

発行所 中央公論新社

〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7

電話 販売 03-3563-1431 編集 03-3563-3692

URL <http://www.chuko.co.jp/>

DTP 柳田麻里

印刷 三晃印刷

製本 大口製本印刷

©2014 Genpei AKASEGAWA, Areno INOUE, Hitori GEKIDAN,
Masaru SATO, Hidemine TAKAHASHI, Kikuko TSUMURA, Yoko
HIRAMATSU, Hiroshi HOMURA, Kou MACHIDA, Shion MIURA, Yi
YANG, Kiyokazu WASHIDA
Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan ISBN978-4-12-004635-3 C0095

定価はカバーに表示してあります。落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製(コピー)は著作権法上での例外を除き禁じられています。
また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ
個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

目次

座を温めるマナー	005
----------	-----

美を匂わすマナー	019
----------	-----

お口を滑らせないマナー	031
-------------	-----

愛が生まれるマナー	053
-----------	-----

逃げて勝つマナー	067
----------	-----

ベタを粹にするマナー	083
------------	-----

ステキなお客さまのマナー	097
--------------	-----

丸くおさめるマナー	117
-----------	-----

食は一大事マナー	129
----------	-----

日本が宿るマナー	141
----------	-----

乗り乗りマナー……………163

のどかに生きるマナー……………181

「旬」をつかむマナー……………199

生み出す人のマナー……………211

こころを激ませないマナー……………231

世渡りのマナー……………249

悟るマナー……………267

マナーの難問……………289

目次

座を温めるマナー	005
----------	-----

美を匂わすマナー	019
----------	-----

お口を滑らせないマナー	031
-------------	-----

愛が生まれるマナー	053
-----------	-----

逃げて勝つマナー	067
----------	-----

ベタを粹にするマナー	083
------------	-----

ステキなお客さまのマナー	097
--------------	-----

丸くおさめるマナー	117
-----------	-----

食は一大事マナー	129
----------	-----

日本が宿るマナー	141
----------	-----

乗り乗りマナー……………163

のどかに生きるマナー……………181

「旬」をつかむマナー……………199

生み出す人のマナー……………211

こころを澱ませないマナー……………231

世渡りのマナー……………249

悟るマナー……………267

マナーの難問……………289

考える
マナー



座を温める
マナー

おいしい（あるいはその逆の）

井上荒野

店に行ったときのマナー

おいしいものを食べたなら、「おいしい」と声高に言う。食べることに異様なまでの情熱をかける家に育った私にとって、これは子供の頃からすり込まれたマナーである。

マナーというよりは条件反射に近いかもしれない。自分でも料理をするようになってからはなおさらだ。「おいしい」と言ってもらえる嬉し^{うれ}しさを知っているから、「おいしい」とぜひ伝えたい。しかし世間には、このことをさほど重要に考えない人たちもいる。

久しぶりに会う女友だちと二人で、カウンターでお鮓^{ずし}。食事がはじまってすぐ、しまった、と思うお任せでおつまみから作ってもらっているのに、何が出てきても彼女は無関心。おいしい、とも、これ何ですか、とも、わあ、とすら言わない。彼女は今難しい恋愛をしていて、その悩みを私に語ることに忙しすぎるのだ。

もちろん私だって彼女の恋が気になるが、板前さんのことも気になってしまう。だって出てくるものはどれもおいしいし、気が利いているのだ。わあ^{わあ}鰹^{かつお}だあ、とか、わあこの煮蛸^{なだこ}は今まで食べた中でいちばんおいしい、とか、伝えたいのだ。

しかし伝えるためには、彼女の話が途切れるのを待たなければならず、途切れるのは彼女が溜息とともに虚空を見つめるときだったりで、そのタイミングで「わあこの煮蛸は」と言うのもどうかと思う。彼女の話にコメントもしなければならぬ。

というわけで私は気もそぞろになり、そのお鮎の本来のおいしさの、半分も味わえなかった気分になってしまふ。込み入った話があるときはお鮎屋さんに行つてはいけません。

ところで不幸にして、おいしくなかったときはどういう態度を取るべきなのか。

もちろん私は海原雄山ではないから、「まずい！」と怒鳴^{どな}つて席を蹴^きつたりはしない。黙って、店に失礼にならない程度に料理を片付けるべくがんばる。しかしこれは自分で代金を払う場合であつて、ご馳走^{ちそう}になつてゐる場合が難しい。「まずい」と言わないにしても「おいしい」と言わなくてもいいのか、という問題が浮上する。

社交辞令の「おいしい」で相手（この場合は店ではなくて、その店を選んだ人）を喜ばせるのはやぶさかではないけれど、その後の波紋が不安だ。このおいしくない店にあらたに連れてこられる気の毒な人が増えるだろうし、その際「荒野さんもおいしいと喜んでいました」とか言われたら、私の味覚の信用が落ちるではないか。

この件に関して、私は最近ある解決策を編みだした。でもいろいろと差し障りがあるのでここでは公開いたしません。

下戸のマナー

穂村弘

「ほむらさんはお酒が飲めないからなあ」と残念そうに云いわれることがある。「すみません」と呟ささやきつつ、なんとなく釈然しやくぜんとしない。僕がお酒を飲めないことを、どうしてこの人が残念がるんだらう。

こんなに美味おいしくて楽しいものが飲めないなんて、ということなのか。でも、例えばお酒と並び称たがされる煙草たばこにしても、「ほむらさんは煙草が吸えないからなあ」とは、決して云いわれないのだ。お酒だけが特別なものは、どうしてなんだらう。やはり「酔う」ところがポイントなのか。

お酒を飲むと一人称が「私」から「俺」に変わる人を知っている。口調や話の内容には殆ほとんど変化はないのだが、彼の口から初めて「俺」が飛び出してきたとき、びくつとした。たぶん、心の底ではないつも「俺」なんだなあ、と思ったのだ。お酒を飲むとHエッチになる人もいる。その姿をみると、心の底ではHなんだなあ、と思う。勿論もちろん、心の底なんていったら、人間はみんなHだらうし、一人称は「俺」どころか「俺様」かもしれない。

でも、お酒は変身薬のように、その姿を表面化させる。だから特別なのだ。と考えると、「ほむらさんはお酒が飲めないからなあ」の後に省略されていたのは「気の毒」「惜しい」「つまらない」だけではない気がしてくる。そこには「ずるい」も含まれていたんじゃないか。

だが、私も飲み会で周囲に溶け込む努力はしているつもりだ。ウーロン茶とジンジャエールを交互

にお代わりもする。「お茶でもお代わりしてくれと嬉しい。一緒に飲んでる気持ちになれるから。相手がずっと同じグラスだと自分ばかり飲んでる気がするんだ」とお酒好きの友人に教えられたからだ。

ただ「素面^{しらふ}でも雰囲気^{ふんいき}に酔えるんです」という言葉にはどうしても無理を感じる。そもそも素面の感覚からすると、日な「俺様」同士のコミュニケーションがうまくいくわけがないと思う。なのに酔っ払い達は不思議にも絶妙なハーモニーを奏でるのだ。話は全く噛み合っていないのに、親友のように仲がいい。「ややややや」「ままままま」「そそそそそ」などという宇宙人の会話にどうやって入れればいいのか。真面目にタイミングを計れば計るほど入れない。

恋愛に関しても、お酒好きの男女と下戸の男女とでは、展開の速度に十倍くらい差があるのではない。下戸同士の恋はなかなか進まない。

学生の頃、一滴も飲めない女の子を好きになったことがあった。なのに彼女はお酒が大好きな男に惚れてしまった。そいつは毎晩暴れまくるからしょっちゅう眼鏡や時計を壊す。そのためにワイルドな風貌^{ふうぼう}に似合わぬディズニー時計ばかり腕に嵌^はめていた。「そこが可愛い^{かわい}の」と彼女は云った。ず、ずるい、と私は天を仰いだ。

酔っ払いのマナー

赤瀬川原平

酔っ払いのマナーといい出すと、きりがなさそうだ。酒に酔うということは、そもそもマナーの外に出るといふ意味合いがある。マナーの治外法権に達することで、あれはもうしょうがない、と思われる。とくに日本では。

でも外国ではそうはいかない。とくにヨーロッパでは。イギリスで聞いた話だが、イギリスのジェントルマンたるもの、酔っ払うのはそもそも恥だという。アルコールだから、当然ほろほろといい気分にはぐれるわけだが、それは内にとどめて、外は崩れずしゃんとして飲んでいてこそ紳士、というかそれが酒飲みのマナーらしい。

じっさいにイギリスのパブで、一人の酔っ払い男が店主につまみ出される現場を見た。それほど屈強な店主というわけではないのだけれど、その場の客はみんなその光景を平然と見つめていた。酔っ払った男への同情の空気はどこにもなかった。

日本ではそうはならない。酔っ払って崩れたにしても、よほどの乱暴狼藉がない限り、おかみさんが出てきて「しょうがないわねえ、ほら、しゃんとして」と立ち直らせて帰りを促される、というようなことになる。

日本は酔っ払いに優しい。というか、甘い。

それには理由があつて、多くの日本人の体はアルコールを分解する酵素が一つ足りないらしい。詳しいことはわからないが、イギリス人などの体にはそれが二つある。だからそもそも日本人の体は欧米人に比べて酒に弱い、とはよくいわれることだ。

だから日本人は宿命的に、酔っ払いに優れてきている。祭りで飲んだんだからしょうがない、といつて容認する風土があるらしい。でもそれはなかなか自覚できない。

あるアットホームな学術グループがあつて、そこにはよく外国からのゲストがくる。ある日懇親会となり、ビールやワインが並んで、みんなほろほろとした気分になり、さらに打ちとけようと、一人が外国人ゲストの女性と肩を組んだ。そのとたんにその女性の表情が変わり、その手をぴたりとはたいた。それまで打ちとけていた空気が、とたんに切り立ってしまった。

やっぱり風土の違い、分解酵素の違いは大きい。そんなつもりじゃなかったといつても、それはそれぞれの歴史の奥にまで細く伸びて繋がっている。

しかし日本でも、最近はいまより肩を組んだりしない。できない、ということもある。セクハラとかパワハラという言葉が広がってきて、アルコール分解酵素が増えたわけではないのに、酔っ払いには厳しい空気が広がっている。そのせいか、大人たちもあまり酔っ払わなくなってきている。時代の変化ではあるけど、何だかちょっと寂しい。

消えるマナー

平松洋子

たいして気が進まなくとも、そこは浮き世のおつきあい、集まりの誘いを無下^{むげ}には断れないことがある。ちょうど忙しいさなかつたり、メンバーに知り合いがいなかったり、それなりの理由がくつくわけだが、しかし、おとなには義理を果たさなければならぬときもあるのです。

でも、行けば行ったで途中からつらくなることがある。けっきょく場になじめず、あーやっぱり来なけりゃよかった、こんどは自分に腹が立ってきたりして。

消えましょう、そんなときは。

「帰る」でもなく、「逃げる」でもなく、「消える」。願わくば誰の気分も害さず、場の空気を乱さず、自分ひとりしずかにその場を立ち去りたいという精一杯の配慮が潜んでいる。迷惑をかけるのは本意ではないから。

ただし、ニンジャみたいにきれいに消えるのは結構むずかしい。使い古された常套手段は「トイレに行くふりをして消える」。これは、おおきなパーティのとき手っ取り早い。ちょっとやっかいなのは、誰がいるかいないか、来たか帰ったか、すぐ知れてしまう十人単位の集まりだ。でも、やっぱり消えたいときはあるもので。

そこで、つとに「消える名人」と異名をとる会社役員氏に質問してみた。あの方、じょうずな消え